Disclosure Project Intelligence Archive (DPIA)
William Pawelec 12-3-00 (Original Tape 72).mp4

Deep Underground Facilities & Tracking Tech Development

ディスクロージャー・プロジェクト情報アーカイブ（DPIA）
ウィリアム・パウェレックのインタビュー

深部の地下施設と追跡技術の開発

[文中の註（*）は訳者による]

ウィリアム・ジョン・パウェレックは 1960 年代の半ば，空軍でコンピューター操作およびプログラミングの専門家として働いた。最初の任地はポープ空軍基地で，次はベトナムだった。彼自身の要望により，この証言は彼の存命中は公開されないことになっていた（*このインタビューは 2001 年 5 月 9 日のワシントン D.C.におけるナショナル・プレスクラブ記者会見の前に収録された。ウィリアム・パウェレック氏は 2007 年 5 月 22 日に亡くなったが，その公開許可が下りたのは 2010 年 12 月になってからだった）。

[1]
==========
スティーブン・グリア： まずお名前を伺い，それからあなたの略歴，つまりあなたが軍，政府，コンサルティング業界で経験されたことのいわば概要を，私たちにも分かるようにお話していただきましょうか。

ウィリアム・パウェレック： 分かりました。私の名前はウィリアム・ジョン・パウェレックといいます。今，56 歳です。私の経歴は 1960 年代半ばの空軍で始まりました。私はコンピューター操作とプログラミングのスペシャリストでした。最初はポープ空軍基地（*ノースカロライナ州），そこでのトレーニングを終えてベトナムに行きました。

私の人生最初の出来事は，ポープ空軍基地にいたときに起きました。その体験が，私の世界を見る目を変えたのです。ある夜，私は一人の若い女性と一緒に森にいました。ノースカロライナ州ファイエットビルの南東約 30 マイル（*ブレイデン・レイクス州立森林公園の辺りかと思われる）のところです。そこで，約 300 フィート離れた場所に UFO を見るという，異常な体験をしたのです。

UFO が現れる前，蛙，コオロギなど，音を発するすべての生き物が，まるで電灯のスイッチを切ったかのように一斉に沈黙しました。その 20 秒か 30 秒後に，1 機の UFO が現れたのです。私たちから 200 フィートないし 300 フィートの距離をとりながら，頭上わずか 40 フィートから 50 フィートの高さを，南東から北西に向かって移動しました。夜の 11 時 25 分頃のことでした。

私たちは小さな湖のほとりにいたのですが，UFO はその北西の端で消えました。沈黙がさらに 20 秒か 30 秒続いた後，蛙，コオロギなど，音を発するすべての生き物がまた一斉に騒ぎ始めました。まるで誰かが再び電灯のスイッチを入れたかようでした。

この出来事の印象があまりにも強烈だったため，私はこういう疑問を抱き始めました――この世界では，本当に何が進行しているのか？ 私はこの出来事を深夜，晴れ渡った夜空のもとで，間近に目撃しました。ですから，これはヘリコプターの見誤りであるはずはありませんし，私が知っていた 1966 年当時のどの空軍機とも違うものでした。

その後，私はベトナムに行き，すばらしい 1 年間を過ごしました。そこはナトラングという熱帯のリゾート地で，たくさんの素敵な人々，とりわけベトナムの人たちとの出会いがありました。

しかし仕事では，私たちの通常業務である保守報告，給与計算，等のコンピューター作業に加え，諜報データを処理し，ワシントンに送るという作業にも深く関わるようになりました。こうした状況の中で，すぐに明らかになったことがありました――我々はこの戦争を，意図しているよりも遥かに高いレベル，遥かに高い効率で遂行することができたはずだと。これが政治的な戦争であることは，誰の目にも明らかでした。勝てる戦争ではありませんでした。

そのことがあった後で，私は軍を辞めました。軍はコンピューターサイエンス分野のほぼ全員に，辞めないでほしいと頼んでいました。実際に空軍は，私たちに 4 年制大学の学位，全額前払い，在籍中は将校と同額の給料を払うこと，等々を約束しました。しかし，私たちの中で軍に残った者は一人もいませんでした。

それから何年かして，私はコンピューターに関する知識を生かす仕事に戻りました。それは最初の妻が亡くなった 1977 年のことで，私はある会社の成長を手伝ってほしいと誘いを受けたのです。ラスコ・エレクトロニクスという会社でした。

この 1970 年代後半，ラスコ・エレクトロニクス社はアクセスコントロール設備の製造および取り付けを行なう世界最大手の会社でした。私は友人の一人から，助けがほしいと言われたのです。彼は間もなく会社（*ラスコ・エレクトロニクス）を辞め，自分の会社を始めるつもりでした。私は快く引き受けました。妻を亡くしたばかりで，何か新しいことをやりたいと思っていたからです。

ほどなくして明らかになったことがありました。セキュリティ業界の人々は，考え方も技術も古めかしいリレーの時代から抜け出せていなかったのです。ですから，この業界にコンピューターのスキルを持つ専門家は多くいませんでした。

こうして 1 年か 2 年のうちに，私はデンバー（*コロラド州）地区内での会社レベルの仕事――当時は雨後のたけのこのような勢いで急成長していました――を超え，軍や国の仕

事を手掛けるまでになりました。そのため，私の機密取扱許可（セキュリティクリアランス）も回復し，有効になりました。

これを契機に，私は国務省の仕事も多く引き受けるようになりました。しかし，私が 1980 年までに気付いていたことがありました――ラスコ・エレクトロニクス社の技術はもうすぐ時代遅れになる。私は技術をアップグレードするように会社内を説得してまわりました。しかし，彼らは乗り気ではありませんでした。

そのため私は，デンバーで二人の技術者と一緒に自分の会社を立ち上げることにしたのです。一人はヒューズ社の人間で，当時はバックリー空軍州兵基地（*コロラド州オーロラ）にいました。そこは現在，国家安全保障がらみの衛星データを受信する主要基地になっています。もう一人はロッキード社の人間です。現在はロッキード・マーティン社になっていますが，当時はマーティン・マリエッタ社でした。

私たちは会社を始め，9 箇月も経たないうちに当時最強の電子セキュリティシステムを開発しました。実際に私たちは，マッキントッシュよりも早く，コマンドコード不要のウィンドウズをシステムに組み込みました。キーをたたき，クリックし，ウィンドウズをあちこち動かすだけのこのシステムは，私たちの自慢でした。

私たちはよく働きました。一時期には，米国中で 17 箇所か 18 箇所の大規模システムを手掛けていました。例えば，フェデラルエクスプレス（*物流サービスを提供する世界最大手の会社フェデックス・コーポレーションの旧社名）だけのために立ち上げた 5 箇所のシステムがありました。これらのシステムをメンフィスにあった彼らの本部に接続し，戦略室のような環境をつくったのです。当時これは衛星接続を使ったポニーファームと呼ばれました。

私たちの会社は，離れた場所にあるセキュリティシステムを衛星経由で接続する最初の会社の一つでした。私たちは行き来する配送データを時分割多重化（time-multiplexed）しましたが，そのことは他の多くのプロジェクトを手掛けることにもつながりました。

時が経ち，私は 1984 年に始めた自分の会社を辞め，‘環状道路沿いの悪党’（*Beltway Bandit；ワシントン D.C.の環状道路沿いに事務所を構え，主に米国政府との事業契約を助けるコンサルタント）たちのために働き始めました。サイク（SAIC），トライコー（TRI-COR），イー・ジー・アンド・ジー（EG&G）といった会社です。彼らの契約業者になったり，一定期間だけの社員になったりしました。何か見逃しているものがあると気付いたのも，この時期のことです。

この時期の私は，大企業向けや国家安全保障のためのセキュリティシステムを開発していました。この業界において，今日のウェブネットワークと同程度の複雑さを持ち，かつハードウェアだけにかかる経費が 50 万ドルから 2,500 万ドルのセキュリティシステムはどういうものか――私はそれを見つける必要がありました。

[2]
==========
私たちの開発したシステムが設置され始めた場所を知ったとき，私は驚きました。私がイー・ジー・アンド・ジー社にいたときです。ある特別なプロジェクトがあり，そこで私たちはある基地のシステムを設計するように頼まれたのです。私は喜びました。そこはトノパ基地という誰も知らないような場所で，古い小さな鉱山町トノパ（*ネバダ州）の東南東にありました。実際にはこの基地が，F-117（*独特の多面体形をしたステルス攻撃機，愛称はナイトホーク）が運用を開始したときの配備基地でした。

F-117はグルームレイク空軍基地には配備されず,そこでは試験が行なわれただけでした。当時はその航空団のすべてがトノパ基地にありました。私たちの仕事仲間はよく,（*F-117を揶揄して）このレベル（*模型メーカー）のモデルはあまり出来がよくないなと言ってはくすくす笑ったものです。

その頃の私の重要な関心事は，トノパで何が行なわれているのかを判断しなければならなかったことと，セキュリティを施すべき地下深部の施設の数が多いことでした。上下に行き交うエレベーターが方々にありました。それは航空機 1 機を搭載できるほど巨大なエレベーターで，航空母艦にあるエレベーターの陸上版といったものでした。

これらのエレベーターは，とても深い地下まで降りました。そして地下で私たちが目にすることができた装置類は，通常の航空機に必要とされるものとは異なっていました。発電機，空調装置，等で，それらはまったく別の種類の装置でした。

私がそのプロジェクトを去って数年後，彼らは F-117 の存在を明らかにしました。気がかりだったことの一つは，今トノパでは何が行なわれているのか？ ということでした。彼らは大急ぎで移動しました。とても大がかりな移動でした。私の記憶にある数字が正しければ，F-117 をホロマン空軍基地（*ニューメキシコ州）に受け入れる準備のために，たった 9 箇月間で 7,500 万ドルが使われたのです。

そのこと自体に問題はないでしょう。しかし，なぜトノパから大急ぎで移動しなければならなかったのか？ 地下深くにある幾つかの施設は，単なる試験運転ではなく，フルタイムで稼働できる状態にありました。彼らはかなり緊急性の高い，新しいプロジェクトをトノパに持ってくる準備のために，それらの航空機，乗組員，支援スタッフのすべてをホロマンに移動する必要があったのです。

しかし，トノパで別の航空機を受け入れる準備が進められていたという兆候は，セキュリティ装置の設置を行なっていた私のスタッフを含めて，私たちの誰一人として把握していませんでした。それが航空機なら，あのオーロラ（*極超音速機ロッキード・パルサーの

愛称）のような通称で呼ばれる何かであったにせよ，ある程度の情報は私たちの耳に入っていたでしょう。

[3]
==========
少し話を戻しましょう。私には取り組まなければならない，もう一つの問題があります。ユーフォロジー（ufology ; UFO 研究）のテーマを超えた領域にある問題です。私はそれに巻き込まれました。それは政府による別種類の支配メカニズムという文脈の中で，この話に関係してきます。

私の昔から変わらない趣味の一つは，仕事上の実益も兼ね，新しい技術を追跡することでした。デンバーに住み働いていた 1979 年のこと，私は偶然にある会社を知りました。もし必要ならその資料をお渡しできます。ファイルに保存してありますから。それはデンバーの北の郊外ノースグレンにあった会社で，もともとは馬に埋め込むチップを開発していました。というのは，当時は――今でもそうだと思いますが――競馬のサクラ（おとり）が大きな問題になっていたからです。

ここに見た目のそっくりな 2 頭の馬がいたとします。あなたは‘犬‘の方を出場させ，誰もがそれを目当ての速い馬だと考えているときに，相手とは逆の方に賭ける，またはそれを逆転させ，相手とは逆の方に賭けます。そのような不正に対処するため，すべての馬に固有の印をつける技術が必要でした。その情報ピル――それをそう呼びたければ――は，当時でもすでに十分小さく，馬用の注射針，大きな皮下注射針を使って馬の皮下に埋め込むことができました。私はそれを見せられましたが，ちゃんと機能しました。そのチップ情報は,7,8 フィート離れた場所から簡単なペン型スキャナーで読み取ることができました。

これはまだ初歩的な技術でしたが，当時セキュリティ業界では，私たちの多くが誘拐された人間の追跡とその所在確認に大きな関心を持っていました。特に，当時のヨーロッパで起きていた状況には注目していました。そこでは NATO（*北大西洋条約機構）将校，さらにはイタリアの首相までが誘拐されていたのです（*アルド・モーロ元首相の誘拐・殺害事件）。これらの人々は機密情報を吐かせられたり，残忍な方法で殺されたり，あるいは吐かせられてから殺されたりしました。セキュリティ業界の目標の一つは,こうした人々を追跡する，すなわちその所在確認を迅速に行なう技術を開発することにありました。彼らの命を救うためでしたが，機密情報の漏洩を防ぐ目的もありました。

私はこの技術を携えて，バージニア州のあるスキッフ（SCIF）ルーム（*建物の中にあって機密情報を処理したり話し合ったりするための閉鎖された部屋）で持たれた会合に出席しました。それは CIA（中央情報局）にいた私の友人と，国務省にいたもう一人の友人が設定したもので，その目的は，この新しい技術の信頼できる正当な利用者だと当時私たちが考えていたグループに対して，私の技術を紹介することでした。

ところで，当時の私は，誰もがある種の刻印システムを体内に埋め込むことになると主張する, 宗教的信念のようなものを聞いたことはなく――聖書の黙示録に獣の数字 666 を刻印する話がありますが――その類のことは考えたこともありませんでした。私はこの技術を，ある種の潜在的で困難な問題に対する，一つの真面目な解決策であると考えていたのです。それは興味深いものでした。警備厳重なこの会合では，そのうちの何人かの出席者は自分の氏名や所属を紹介しませんでした。私は二人の友人が，そのときその場にいるべき正当なグループに声をかけたのだと信用するしかありませんでした。彼らはすべて信頼できる人々なのだと。

それが間違いでした。会合の後で，私はそこにいた二人の人物が，間違いなく会合に呼ばれていなかったことを知りました。それにもかかわらず，彼らは会合のことを知っていました。その会合が何のためのもので，誰が参加するのかも知っていました。後で調べて分かったのですが，彼らのうちの一人は農務省，もう一人は財務省の人間でした。

私たちがこの二人の人物に目を向けたのは，彼らの質問の仕方が印象的だったからです。その質問内容, そのときの彼らの立ち振る舞い, さらにはボディーランゲージに至るまで，彼らはその会合に招かれた誰よりも，この技術の正当な利用者らしく振舞いました。

実際，彼らの最大の関心事は，20 億個，30 億個のチップをどれだけ速く製造できるか，また個々のチップにそれ固有の識別番号を与えることができるか，ということでした。ピルの形をした，とても小さな私の装置は，多方面に応用可能な性能を持っていました。それは基本的に自動応答装置で，ある周波数の信号を受け取ると，チップはそれ固有の識別番号を返します。その番号は，一度チップが製造されたら変更することができません。さらにこのチップは，追加することのできる多くの機能を持っていました。例えば体温，血圧，脈拍，さらには脳波形の監視です。しかし，それは将来を見据えた研究のためのものでした。

私は数箇月前，珍しい話を集めているあるウェブサイト上で，東部に住む一人の婦人が 1999 年に身体からチップを除去したという記事を読みました。彼らはその拡大写真をウェブサイトに掲載しましたが，それは私がデンバーで開発したあのチップとほとんど同じものでした。ただし，機能の幾つかは強化されていました。その婦人によれば，チップは 1980 年か 1981 年に埋め込まれたものだということでした。

そのチップをつくった人物は，もはやお金には困らなくなったと聞きました。彼はこの技術の多くの部分を，密かに，私たちの知る由もない相手に渡したのです。このことは，ワシントンにいる私の友人たちを不安にさせました。なぜなら，彼らはどこにもそれを持ち出したことがなかったからです。他の誰かがそれを持って逃げたのでしょう。それが誰か，私たちにはまったく分かりません。

さて，1984 年のことです。私はインターネットでセキュリティ業界や他業界の文献をあさっていました。そのとき，もう一つ別の技術を見つけたのです。そして，ニューサウス

ウェールズ大学（*オーストラリア）のある教授のことを知りました。そのファイルを今でも持っています。彼はニオブ酸リチウムの微細チップをつくる方法を発見していました。彼は偶然にも，そのチップにひっかき傷をつけました。そこには RF（*無線周波数）送信機がありましたし，まったくの偶然で受信機もありました。こうして彼は，ある特定の周波数を使えば，そのチップにエネルギービームを送り込むことができ，チップはそれに応答してある番号を返すことを見つけたのです。

結局のところ，彼の開発した技術は私の目に留まることになりました。私たちは彼をデンバーにある私たちの会社，コロラド・システムズ・グループに連れてきました。彼は初歩的な微細チップを幾つか持ってきていたので，私たちはそれらを試験しました。チップは完全な受動型で，きわめて小さなものでした――約 32 分の 1 インチ，厚さはわずか 2 千分の 1 インチほどでした。それにエッチングを施すことにより，それぞれのチップにはそれ固有の特徴を刻むことができます。そして，理論上このチップは――そのサイズとエッチングの程度により――数十億単位で固有の番号を持つことが可能でした。

実際，私たちが行なった試験の結果は面白いものでした。私たちはまず送信機と受信機を準備しました。それから天井の換気口グリルを外し，それに送受信機を押し込みました。グリルをアンテナとして使ったのです。こうして私たちは，きわめて原始的なアンテナである一片のグリル使い，小さな段ボール紙片に貼り付けたチップの番号を 100 フィート離れた場所から読み取ることができました。私たちはそのときの周波数を知らなかったので，すぐに一般的なアンテナに変えましたが，そうすることで，ベニヤ板のような薄い材料層の上からでもそれを読み取ることができました。

私たちの受けた感銘があまりにも大きかったので，私は改めて，これは本当に何かの役に立つ技術だと感じました。というのは，彼が持ってきた幾つかの資料によれば，チップに微細なコイルアンテナを取り付けると，1 マイルの距離からでも読み取りが可能だったからです。彼はその後も解析を続け，数週間後に再び私のところに戻ってきました。そして，こう言いました――中心部にチップを置いた直径 2 インチのコイルアンテナは，かなりの程度まで増幅器として働き，返送波は元の周波数の高調波になる。彼の複雑な計算によれば，宇宙空間では 120 キロメートル離れたところからでも読み取ることが可能でした。さらには，そのチップに別の属性を与えることもできました。

私はこの技術を持って再び，しかし今度はより慎重に，バージニア州のある下請け会社で持たれた会合に出席しました。私は，その会社が情報分野の仕事を数多く手掛けてきたことを知っていました。この会合には，ボブ（*国務省の友人）と CIA の友人に加え，国務省全体のセキュリティ責任者も出席していました。

しかし，またもや話し合いが始まる間際になって，まともな信用資格を持つ二人の人物がドアから入ってきました。彼らが本当は何者なのか，誰もそれを知りませんでした。彼らは申し分のない信用資格を持っていましたが，私の二人の友人からはこの会合に呼ばれていませんでした。それでも彼らは，私たちの通話内容を知っていたのです。彼らは時刻，

場所，予定されていた話し合いの内容まで正確に知っていました。私の通話は，盗聴防止機能付き電話回線を使って行なわれたはずでした。

このときの出来事について，私がもっと不安に感じたのは――私はこのときの記録を持っていますが，それには当時の国務省のセキュリティ責任者名が書いてあります。私は彼をよく知っていました。というのは，私はメインステイ（*セキュリティ会社）や，ワシントン D.C.のフォギーボトム（*国務省の俗称）内にあるその本部ために，セキュリティシステムの少なくともその主要部を設計したからです。だから，彼と私は互いによく知る間柄でした。

ボブが退職前にやりたかったことの一つは，家族に――特に高校生だった二人の息子に――海外での生活を経験させてやることでした。そのため彼は，自ら降格して東アフリカ地域のセキュリティ責任者になりました。彼はこの会合が終わって間もなく，家族と一緒にナイロビに引っ越していきました。

ボブと私は,ワシントンにいる別の接触者を介して目立たぬように連絡を取り合いました。私たちは，この二人の人物が何者なのか，苦労しながら探り始めたのですが，私を困惑させたのは，ニューサウスウェールズ大学のその教授が，まったく突然に巨額の金を獲得したという事実でした。その技術は移転され，教授はその後の人生を遊んで暮らせる身分になりました。

私はサンフランシスコにいる友人に，この技術のことを密かに教えていました。彼が国家安全保障と人の追跡に別の方面から関わっていたからです。彼はシリコンバレーにある小さな会社のために，物理的なセキュリティシステムを製造するプロジェクトを立ち上げました。アクセスコントロール，カメラによる進入監視など，役立つと思われるものなら何でもです。その会社は，ヨーロッパの大手電子企業シーメンスの一部門でした。彼によれば，彼らはこうしたチップ，私が彼に説明したチップに不気味なほどよく似たチップを，数十億個の単位で製造していました。1 年後，その会社は彼に，工場を閉鎖するのでそのセキュリティシステムを買い取る気はあるかと訊いてきました。私の懸念は，これらのチップがすでに数十億個製造されてしまったということでした。彼らに何が起きたのか，誰が知り得るでしょうか――とにかく彼らはいなくなりました。

一方，ボブはまだ諦めずに，この二人の人物が何者で誰のために働いているのか，彼らの意図は何なのかを知ろうとしていました。彼と私は長い時間をかけ，この 1980 年代半ばに政府内で実際何が起きているのか，誰が何をコントロールしているのか，彼の懸念は何かということについて語り合いました。というのは，彼は多くの不正が行なわれている事実をつかんでいたからです。おそらくボブは，何人かの協力者を得て進行中のさらに多くの物事に気付き，私たちの共通の友人である CIA の接触者に連絡してきたのです。第二次大戦後 CIA の設立にも関わったこの接触者は，まだ私と連絡を取り合っていました。彼は私にこう言いました。“ボブは何か重大なことをつかんだ。彼は用事で帰国していて，我々は会うことになっている”

その数日後,ボブは二人の息子をナイロビの私立高校で降ろし,仕事に向かっていました。その途中，信号で停止したボブの車に，1 台の頑丈なランドローバーが時速 60 マイル（*時速 97 キロメートル）で側面衝突しました。彼は即死でした。朝の 7 時から酩酊していたとされるその英国人は，病院に運ばれた後，まもなく姿を消しました。そして，彼が残した証拠のすべては，人物が誰かという点に関して捏造であることが判明し，証拠書類とはなりませんでした。ボブの死は事故ではなかったのです。

この埋め込みチップ技術に誰が関与しているのか，そのことにボブはやや近づき過ぎていたのだと思います。私はいつもそれを心配していました。私たちは，政府に気付かれることなくそれを行なっている人物を見つけ出そうとしてきました。なぜなら，それが誰であろうとその者は，いつでもどこでも私たちの政府に侵入し，何が行なわれているのかを探り出す能力を持っていたからです。それも，瞬時にです。

[4]
==========
私はこうした問題を 1980 年代初期から追求してきましたが，今確信していることは，世界には少なくとも四つの権力グループがあるということです。彼らはあらゆる想像を超えた富を持っています。彼らは先進的な技術も手にしています。また，彼らは様々な計画を支配しています――特に闇の計画です。私たちの政府内の計画だけではなく，おそらくロシア政府や中国政府のものもあります。彼らの政策――私たちが知る意味での政策ですが――は皆同じではありません。彼らのアジェンダ（行動原理）は，私たちの政府の――少なくとも私たちが理解している政府の実際のアジェンダとは，まったく異なるものです。信じがたいことですが，彼らは自分の周囲で起きているあらゆる事柄を，その細部まで追跡する能力を持っています。

私たちは彼らに名前を付けました。しかしそれは，彼らが自らを何と呼んでいるかには何の関係もありません。私たちは彼らを，単に‘四騎士（The Four Horsemen）’と呼びます。これらの騎士は，ときには協力し合い，ときには互いに敵対し合います。それは今も進行中の，誰が世界の勝者になるのかという，ある種の低レベルの戦いです。すべての騎士に共通する特徴は，あらゆる物，あらゆる人間を支配したいという，絶対的欲望であるように思えます。そして，彼らはそれぞれ独自の価値観を持っています――おそらくは彼らの生き方，そしてその行動の指針となる根源的価値観です。こうしたことが，私たちがネバダ州で経験した多くの奇妙な出来事を引き起こしたのだと考えています。そのことは――今考えてみると――私自身が政府の間違った人々に持っていったあのチップ技術に起きた事柄とも，奇妙に関連しています。なぜなら，私たちはあの技術を，実際に意図していた目的に使ったことは一度もなかったからです。

スティーブン・グリア： 会合にやってきた二人の人物ですが，部屋に入るために示した信用資格はどのようなものでしたか？ 彼らは何を持っていましたか？ FBI（連邦捜査局）とか……

ウィリアム・パウェレック： それよりも遥かに上です。彼らは NSA（国家安全保障局）とか，NRO（国家偵察局）とか，何かその類の信用資格を持っていました。後で私たちが調べたところ，そのような人物は存在していませんでした。彼らは実在していませんでした。それにもかかわらず，彼らの信用資格に非の打ちどころはなかったのです。アクセスコントロールの身元確認でも，彼らが持っていた識別システムは，私たちのすべての認証メカニズムを難なく通過しました――生体認証も，指紋認証も，眼球認証も，他のどんな認証をも通過しました。アクセスコードさえも通過しました。彼らはそれをすべて知っていました。彼らはそれをすべて持っていました。しかもそれは，実際に政府機関が持っているそれよりも，質において格上でした。これほど分かりやすいことはありません。それが意味するものは，際限のない予算です。

スティーブン・グリア： これらは国際企業や機関の裏組織による，ある意味での私的な活動だと思いますか？

ウィリアム・パウェレック： もしそうなら，それは私がこれまで一緒に働いてきた企業のセキュリティ関係者を遥かに超えるレベルの活動です。私はすべての主要石油企業と一緒に働いてきました。私はすべての主要コンピューター会社と一緒に働いてきました。私はきわめて高性能なセキュリティシステムを設計していました。商業界の人々の中に，自分は企業要件または企業アジェンダ（行動原理）を超えた何事かに巻き込まれていると，少しでも心配している人間は一人もいませんでした。彼らは皆，忠実な企業人でした。もしもその中に，企業の指揮系統を外れて私的に人を雇い，特定の仕事をさせようとする人間がいるとしても，私には知る由もなかったでしょう。

私が奇妙だと言いたい一つの分野は，この国の航空宇宙業界です。私は航空宇宙企業数社のために，多くの仕事をしました――システムの具体的な設計，または少なくともそのコンサルティングです。その仕事の中で，私は自分よりも遥かによく知っていると思える人々に出くわすことが何度かありました。彼らのうちの何人かは，ボディーランゲージをきわめて巧みに操りました。もっとも，完璧とはいえませんでしたが。また偶然にも，進行中のプロジェクトを抱えた幾つかの会社を知る機会もありました――特にカリフォルニア州やデンバー地区の会社です。彼らは闇の‘向こう’にあるセキュリティ事業を請け負っていました。私は彼らとは間接的に関わっていましたので，その違いを見分けることができます。長い間，ある種の論評がなされてきました。そうした論評をすべて目の前に並べ――それらを額面どおりに捉えても，どれも単独では意味をなしません。しかし，4 年から 5 年の間の 4 本，5 本，あるいは 10 本の論評を眺めてみれば，あるストーリー展開が見えてきます。

そのストーリーとは，基本的に航空宇宙業界では，闇のプロジェクトの存在を示す多くの仕事が行なわれており，その闇は益々深くなっているということです。そこでは電気重力，スカラー技術，等々に関係した仕事が行なわれています。私たちの議会がそれに気付いているとは思えません。闇予算を承認した軍でさえそうでしょう。議会や軍はオフライン状態に置かれているのです。彼らの資金は，何か他の仕組みを経由してやってきます。これはその一例ですが，私は 1980 年代に遡って数十億ドルの余分な金を得ていた闇のプロジェクトを知っています。私は密かに教えられたのですが，その超過予算は 100 万ドル以下でした。だから，数十億ドルのお金が何か他のものに注ぎ込まれていたのです。一人の紳士が私にそれを確証しました

スティーブン・グリア： どの企業ですか？

ウィリアム・パウェレック： それはノースロップ社でした。そのプラント 29 です。しかし，一連の出来事の全体を貫くシナリオを眺めたとき，あなたは否応なしにサンドボックス（*コンピューターセキュリティにおける一種の保護領域）から顔を出し，少なくともサングラスをかけることになります。そうすることで，あなたは眩しい太陽に目を向け，現実が一体どうなっているのかを知ることができるでしょう。私は自分が関わりを持ったあることから，冷戦が緩和に向かうことを 1985 年の時点で知っていました――その頃までには，新しいタイプの戦争に変わっていたのです――1980 年代後半までには予算が一斉に縮小され始めていたため，私は事業から撤退する準備をしなければなりませんでした。私はサイク社，トライコー社など，環状道路沿いの悪党数社とのコンサルティング契約を終わらせました。私は徐々に事業から撤退し，消費市場に参入しました。意外かもしれませんが，私は 1989 年にニューメキシコ州で有線放送会社を始めました。

スティーブン・グリア： 会合に現れた人物，そのようなレベルで活動している人物たちについて，もう少しお話していただけませんか？ あなたの見るところ，彼らは大統領や指揮系統に応答していますか？ ゲームはどのように行なわれ，誰が主導権を握り，誰がそうでないのか，もう少しお話していただけませんか？

ウィリアム・パウェレック： スティーブ，良い質問です。私が何度となく出会った，本流を外れたように思えるこれらの人々の精神構造，態度はどのようなものなのか？ 彼らは指揮系統の内部にはいません。彼らの外見，振る舞い，接したときの感じは，官僚に似ています。彼らの近くに二十数年間いて分かるのですが，彼らには他にはない独特の雰囲気があります。しかし，これらの人々はアジェンダ（行動原理）を持っています。それは，政府本流に身を置く人間なら決して見ることのないアジェンダです。

例えば，私は 1980 年代初期のある期間，農務省およびメリーランド州政府のためのあるプロジェクトで働きました。その中で私たちは，フードスタンプ（食糧配給券）を止めて，キャッシュレジスターと連結したクレジットカード機に移行するよう提案しました。考えられたのは，通すタイプの簡単な ID カードか，もし必要ならキーパッドを使う，より高いレベルのアクセスコントロールカードでした。そのキーパッドには 1 個の暗証番号が埋

め込まれており，特定の個人のみがそのフードスタンプから食糧を引き出せる仕組みでした。当時は――今でもそうだと思いますが――フードスタンプの分野ではかなりの割合で詐欺が横行し，その被害額は年間数十億ドルに達していました。私たちは，この計画を掌握する実に多くの農務省高官と会合を持たなければなりませんでした。彼らは，アクセスコントロール装置のことをとてもよく知っていました。特に，私たちが彼らを教育した後ではそうでした。私たちは彼らに，年間数十億ドルの公金を節約するために役立つ，その技術の限界と能力を教えました。

しかし，プロジェクトは頓挫しました。当時の政策として，彼らはこの問題を解決しようとは思っていなかったのです。実際，様々な委員会に多数のメンバーを出している大都市では，彼らが折に触れリベートを受け取っているとしても不思議ではありません。農務省も例外ではなく，官僚との間を取り持つ仲介者は少なからずいるのです。しかし，私たちがあの会合で出会った農務省の人間は，これらの人々よりも遙かに深い知識を持っていました。また，その態度も他とは違っていました。それは，ほとんど政治には関心のない態度でした。また，純粋に技術的で，とても客観的でした。だから，発せられる質問はこのようなものでした――それをどれくらい短時間で製造することができるのか？ 製造工場の立ち上げにはどれくらい時間がかかるのか？ 一定期間にどれくらいの個数を製造できるのか？ その信頼性はどうか？ 消去は可能なのか？ それを人体に埋め込むとどんな弊害があるのか？ 拒絶反応は起きないのか？ 等々。興味深いのは，こうした質問が官僚から発せられたことは一度もないということです。 彼らは，私たちがそれらの問題を解決するために，それらを克服するために，契約を結ぶことを前提としていました。

スティーブン・グリア： これらの埋め込みチップを使って，何が行なわれていると思いますか？

ウィリアム・パウェレック： 私の考えですが，こうした埋め込みは広がっていると思います。軍隊では，少なくともこの 10 年間，特殊部隊に埋め込みが行なわれてきた兆候があります。初めにも述べたように，他の人々にも埋め込みが行なわれてきました。ある婦人は，イライラの原因であったチップを外科医に頼んで除去してもらいました。調べてみて分かったのは，そのチップは私が 1979 年にデンバーからワシントンに持っていったあのチップに，きわめてよく似ていたということです。

スティーブン・グリア： そのチップはどのようにして埋め込まれたのですか？ 彼女はそれを覚えていますか？

ウィリアム・パウェレック： 彼女は覚えていません。まったく覚えていません。彼女が覚えているのは，ほぼ‘エイリアン誘拐’の状況ともいえるものです。記憶が曖昧で，そのときの時間が失われているのです。私はその話の全容を知りません。でもスティーブ，それについて幾つかの調査を行なうことはできます。まずそのウェブサイトの記事を見つけ，そこから彼女は何者か，チップを取り出した医者は誰か，等々を辿っていくのです。

[5]
==========
スティーブン・グリア： 話を元に戻しましょう。トノパの施設のことでしたね。彼らはF-117（*独特の多面体形をしたステルス攻撃機）をそこから移動しました。そこには何があり，何が行なわれていたと思いますか？

ウィリアム・パウェレック： トノパには，最先端の装置を配した，とても近代的な基地があります。そこには旧式の設備なども混在しています。なぜなら，空軍は捨てる必要のないものを捨てたりはしないからです。彼らはやりくりの仕方を知っています――そうする必要があったからです。それにしても，あの基地の重要性を過小評価することはできません。まず，それはきわめて辺鄙な場所にあります。それから，そこは二つの低い山脈に囲まれています。ですから，地上からの観測によってはその基地を覗き見ることができません。それは，エリア 51 よりもさらに辺鄙な場所にあります。エリア 51 なら，UFO 研究家がどこかの山の頂上に登り，10 マイルでも 15 マイルでも離れた地点から見ることができます。しかしトノパは，ネリス実験場の国有地に侵入することなしには，本当にどの方角からも見ることができないのです。

実際，1980 年代半ばのセキュリティに対する懸念は，とても深刻なものでした。私はイー・ジー・アンド・ジー社を介して対応した将軍の一人から，こう訊かれました――10 マイル，15 マイル先まで見通し，侵入者を確実に感知できる周辺セキュリティ監視システムとして，あなたが思い付く最も大胆なアイデアはどのようなものか？

それはとても変わったものでした。というのは，私は自己発電機能を内蔵した模造の巨礫（岩）を思い付き，そこに望遠鏡に接続した特殊なカメラを取り付けたからです。私たちは本当に，10 キロメートル先のジャック・ウサギ（*北米のカナダ南部からメキシコにかけて広く分布するノウサギ属のウサギ）を月明かりのない夜に監視し，それを確実にカメラに捉え，実際にその写真を撮ることができたのです。監視システムは機能しました。私たちはそれを，大して意味のない騎馬警備員による巡回と抱き合わせにし，幾つかの提案を行ないました。

しかし実際には,彼らは政府の別の部門のために働いていました。これらの提案に対して，彼らはとても真剣でした。彼らは人造の巨礫をつくるという，そのような類の提案を真剣に受け止めました。そうした巨礫の中には，とても複雑な電子機器がたくさん詰め込まれます。もちろん，人造の巨礫は丘の上の戦略的な崖に，基地の外側を見るように取り付けられるのです。次にそれらの機器は，埋設ファイバーまたは隠されたマイクロ波送信機を経由して，基地の戦略室に接続されます――そこで長期にわたる計画が遂行されるのでない限り，その種の技術にそれほどの金をかけることは，通常あり得ません。軍はそんなふうにして金を無駄にすることはしないのです。トイレの便座に 6 万 5 千ドルを払ったりはしますが。

スティーブン・グリア： トノパの施設は，UFO に関係したハードウェアやプロジェクトのために使われていたのでしょうか？

ウィリアム・パウェレック： その形跡はありました。彼らは，私が仕事のためにスタッフをそこに送り込む前に，これらの地下施設にあったものを移動しました。床面にあった幾つも擦り傷――使われた設備には摩耗や使用の跡が残るものです――これらの施設には設備がありましたが，私の部下が中に入って仕事ができるように，彼らはそれを他に移動していたのです。

イー・ジー・アンド・ジー社には，ネバダ州南部のあらゆることを知り尽くし，管理してきたという歴史があります。それは誰もが知っている事実です。彼らはかつて実験場そのものを管理していましたし，今もなお監視しています。彼らは自前の航空路線を持ち，それで毎朝従業員をパプース, エリア 51, トノパへと運び, 夜には連れ帰ります。ですから，私たちが今ここで話している環境は何ら異常なものではありません――そこは，ほとんどイー・ジー・アンド・ジーの裏庭と呼べるような場所なのです。同社の歴史は第二次大戦中の核実験期，およびその後の初期試験にまで遡ります。同社は科学分野で政府の仕事を内々に行なう会社でした。つまり，情報公開法（FOIA）の対象外です。

これは私が抱いている大きな懸念の一つですが，もし私たちが闇のプロジェクトの世界で行なわれていることを本当に知りたいと思うなら――議会や大統領による合法的な手順を経てという意味ですが――情報公開法の規則を変更する必要があります。法の抜け穴をなくし，闇のプロジェクトを含むすべての政府契約業者の情報を，情報公開法システムにより請求できるようにしなければなりません。というのは，今のそれはザル法だからです。それは議会や国民からの請求を故意に却下できる，彼らにとっての巨大な裏口になっているのです。

[6]
==========
スティーブン・グリア： 私は科学界やメディアの人々がこう言うのを何度となく聞いてきました――我々はこれほどの秘密を隠しておくことはできない。もしもこうした電気重力機や UFO が存在するなら，人々はそれについて知るだろう。秘密を隠すことなど，これまでも断じてできなかったし，現在でもそうだと。このような主張をする人々に言いたいことはありますか？

ウィリアム・パウェレック： 私たちの政府に秘密を隠す能力があることを物語る，長い歴史があります。半世紀近くではないとしても数十年間うまく秘密を隠してきた，数多くの計画があります。私たちはこの 10 年間に，そうした計画があったという声明を何度も目にしてきました。例を挙げれば, 梅毒研究（*タスキギー梅毒実験）があります。確か 1930 年代にアラバマ州で行なわれた計画で，人々はそれが 1980 年代後半か 1990 年代初期に公開されるまで知りませんでした。それから日本軍の満州における生物戦部隊（*満州第

731 部隊）があります。彼らは戦争捕虜を含む数千人を殺したにもかかわらず，戦犯免責を受けました。米国が彼らの記録，実験結果を手に入れたかったという，ただそれだけのことと引き換えにです。この計画は公開されませんでした。私の記憶によれば，計画の全容は 1990 年代初期まで公になりませんでした。つまり，彼らはその巨大プロジェクトを 50 年近くも秘密にしてきたわけです。フォートデトリック（*米国陸軍感染症医学研究所）や他の場所で行なわれる自国民に対する生物学的実験研究は，今なお続けられています。ですから，もし彼らが取り組んでいるとされることを人々が心底信じているなら，政府が秘密を隠すことは可能です。可能どころではありません。彼らは大抵の場合，成功してきたのです。

私の懸念は，プロジェクトが闇の‘向こう’に行ったとき，隠れた動機を持つ人物がこうしたプロジェクトを管理したり，資金を出したり，世にも恐ろしいことをする力を持ったりすることなのです。彼らは自ら資金を出します。誰を頼りにすることもない，際限のない資金です。それに予算名目などありません。彼らは文字どおり国庫から資金を引き出すことを正当化します。私たちがいわば監査する必要があるのはここなのです。こうしたプロジェクトすべてに監査を行ない，責任のある委員会が闇の資金の流れを監視し始める必要があります。

スティーブン・グリア： これは米国に限ったことだと思いますか？ それとも世界規模で起きていることですか？

ウィリアム・パウェレック： 私の見るところ，これは世界規模で起きていることです。私たちのプロジェクトは他の同盟国政府と密接にむすびついています。実際，私は自分が取り組んだ初期の極秘プロジェクトの一つについて教えられたことがありました。私の機密取扱許可（セキュリティクリアランス）が回復した 1970 年代後半のことです。それは私たちと英国人との間には秘密協定があり，それぞれが発明したものを互いに共有するというものです。それが何であれ，無条件にです。もしこの国のベビーブーマーたちがある格好をしたなら，それがどんなものであれ英国人もまたそれと同じ格好をすることができるということです。第二次大戦中につくられたその秘密協定があるので，どんな技術も隠しません。似た同盟国が他にもあります。

思うに，私たちが見ているのは，プロジェクトに取り組んでいる異なる国の科学者たちのクロスポリネーション（*cross-pollination；異花受粉；様々な要素の間で影響を与え合うこと）だと思います。米国における最高度の極秘領域においてさえ，それが見られます。私はこうした人々に何度も出会いました。

スティーブン・グリア：闇のプロジェクトをあれこれ実行しているグループのことですが，そのアジェンダ（行動原理）は何だと思いますか？ あなたのセキュリティコンサルタントとしての経験をいくつか繋ぎ合わせたとき，そこに見えてきたアジェンダとはどういうものですか？

ウィリアム・パウェレック： 闇のプロジェクトの背後にあるアジェンダ（行動原理）は何かと考えたとき，1970 年代から 1980 年代初期にかけての私の見方は，米国の防衛でした――彼らは自由主義世界を守るために働いていると。しかし，その状況をよく見れば見るほど，彼らのアジェンダが米国の目標とは無関係であることが明白になります。そしてその態度はといえば，一種の支配――権力と支配です。人はそれを世界で 2 番目に古い職業と呼ぶかもしれません。

スティーブン・グリア： あなたは友人が関わったナイロビでの恐ろしい事件に触れ，彼は殺されたようだと述べました。秘密を守るために致死力が使われた他の証拠を見たことはありますか？

ウィリアム・パウェレック： あの事件ほどのものはありません。

スティーブン・グリア： でもあなたは，致死力が使われてきたと思っているのですよね？

ウィリアム・パウェレック： ええ，間違いありません。必要があれば使われます。

スティーブン・グリア： 私の質問の意味が正確に伝わっていないようです。

ウィリアム・パウェレック： スティーブ，それは彼らのうちのあるグループが持っている能力です。彼らは漏洩の危険を減らし，人々を支配し，秘密や恐怖を維持するために，必要とあらば部隊や他の支配装置を使う能力を常に持っています。

ナイロビでボブに起こったことを私なりに考えるなら，彼らはボブがあまりにも真相に近づき過ぎ，恐れを知らず，あまりにも力を持ち過ぎていると判断したのではないでしょうか。だから，彼らはボブを除去する必要に迫られ，通常のやり方でそれを実行したのです。それはニューメキシコ州の下院議員シッフ（*共和党下院議員スティーブ・シッフ）の場合のような奇妙な出来事ではありませんでした。シッフは下院議員として人生のほぼすべてを屋内で過ごしていたため，ほとんど日の光を浴びることがありませんでした。それにもかかわらず，悪性の癌になったのです。不思議なことでした。

その問題（*不都合な人々の除去）を解決する方法はいろいろあります。私は元シールズ（*SEALS；米国海軍特殊部隊）だった人々と話したことがあります。彼らはかなり奇妙な，何かの使命を帯びて出かけていきます。私は何人かの傭兵とも話したことがありますが，それは時々こういう種類の人々と偶然一緒になるからです。彼らは影響力のある人々を除去する任務を負っていました。彼らはそれを，一つの支配装置を使うようにして実行します。これらの人々は義務を負っているため，命令をそのまま受け取り，それが何であろうと言われたままに実行します。まさにナチスの哲学です。

スティーブン・グリア： そのとおりです。ではあなたは，誰かを脅したり除去したりするために，例えば癌のような生物学的問題を引き起こしたり，使用したりすることがあると思っているのですか？

ウィリアム・パウェレック： この分野で私たちが直面する問題の一つは，それが秘密にされるということです。誰か周辺の者がそうした方法，人々を操るための装置を目にしたとき，彼らはその独特の雰囲気を感じます。私はそれを実際に味わうほど近づいたことはありませんし，知りません。しかし，目を向ける必要があるのは，それに使われる心理学的要素です。ある有名人が特定のやり方で，標的となる人物を口説きにかかります。行なわれることは，支配し続けようとする標的に神への恐れを植え付けることです。そうすると彼ら（*標的）は，神に逆らうことは何も言わなくなります。彼らは探るべきでないものは探らなくなります。下院議員シッフは，探るべきでないものを探ったのです。

私の強い関心を引いた処刑の一つは，数年前に米国商務長官（*ロン・ブラウン）がユーゴスラビアの山頂で死亡した事件（*1996 年の米国空軍 CT-43 墜落事件）です。同乗していた空軍の添乗員（*シェリー・ケリー技能軍曹）は，後部補助席に座っていたため助かりました。ある英国人グループが最初に現場に入りました。山を下りるとき，彼女は生存しており，元気でした。ところが，山を下りて空港に着いたときには，彼女は死亡していたのです。彼女には小さな青あざがあるだけでした。あの英国人特殊部隊が何をしたのか，彼らが米国の他の特殊部隊とどのようなつながりを持っているのか，誰かがそれを詳しく調べる必要があります。

さらに奇妙なことは，（商務長官の）遺体がドーバー空軍基地に戻ったとき，その頭頂部に 45 口径（*直径 11.43 ミリメートル）の弾痕が一つあったことです。エックス線による予備検査では，脳内部にある種の削ぎ跡が見られました。遺体はその日のうちに大急ぎで火葬場に搬送されたため，本格的な検視解剖が行なわれることはありませんでした。ドーバー空軍基地の関係者は，彼らがとった行動を厳しく非難されました。プロフェッショナルの世界では，氷結した二酸化炭素または窒素の弾丸を使えば，こうしたことが可能です。砕けた頭蓋骨の破片以外は何も残らないのです。

これは私たちの多くにとり，重大な懸念です。なぜなら，これは今も進行中のことのように思われるからです。特にこの 10 年間は，それが顕著に感じられます。それは私たちの政府の全領域において,国内的にも国際的にも,きわめてあからさまになってきています。今日では誰でもインターネット上で，そうした事態を暗示する情報を追いかけることができます。支配を続ける必要性は益々増大し，こうした（支配）装置の使用はかつてないほど露骨になっているのです。

スティーブン・グリア： これはどこに向かっていると思いますか？ 私たちが向かう先について，あなたは何を懸念していますか？

ウィリアム・パウェレック： 私が懸念するのは，この国の自由，そして自由主義世界の自由です。それは単純過ぎると思われるかもしれません。しかし，私たちは生きる基盤である価値観を持つ必要があります。私の価値観は共和党の前政権です。もし私たちがそれに戻ることができれば，それはかつて人類が発展させた最強の政治形態になるでしょう。その理由は一つ，基本的に誰もが主権者になれるということです。そのことを過去 200 年ほどの歴史が証明してきました。それはこの国が誕生して以来の，私たちが経験してきた技術的発展の歴史です。それは第一に米国に集中してきました。それは人類の進歩を動機づける，私たちが持ち得る最高の仕組みです。しかし，これを阻もうとする勢力があります。もし私たちが，こうした有害勢力を無力化する方法を見つけられなかったなら，一つの種として私たちの生き方，生命というものについての私たちの概念は，無に帰すことになるでしょう。

スティーブン・グリア： このインタビューの中で，あなたは幾つかの問題に触れました。政府機関と企業のどの機関が，この活動全体に大きく関与していると思いますか？

ウィリアム・パウェレック： スティーブ，もしそれが政府や企業のレベルにおいて，どの構成要素が私たちに対して影響力を持っているかということだとするなら，私はこう言いたいと思います。企業レベルでは――もし新しい推進技術について話しているのであれば――まず最初に目を向けるべきは，航空宇宙業界です。私はその関係者の何人かと，長期間にわたり深い議論をしてきました。彼らは自分自身あるいはその父親たちが，様々な航空宇宙会社で働いてきた人々です。彼らは遥か昔の 1950 年代から 1960 年代，さらには 1970 年代にかけて，直接研究に携わってきました。彼らは UFO から逆行分析（リバースエンジニアリング）した技術において，ほとんどの問題を克服していると感じています。興味深いことに，彼らはそれを UFO とは言わず，AVC と呼びます。

スティーブン・グリア： それは何を表す言葉ですか？

ウィリアム・パウェレック： Alien Visitation Craft（*来訪異星人の宇宙機）です。つまり，彼らは自分たちが何者なのかを知っているのです。一般的な言葉を使うなら，その質問は彼らの皮膚は何色かというようなものです。しかしこれらの会社――おそらく名前は知っているでしょう，すべて国内トップファイブに名を連ねる会社です――彼らは程度の差はあれ，すべて闇の活動に関与しています。そして彼らは，彼ら自身の闇の中に闇（black within black）を持っています。これらの会社の多くが，スカンクワークス（*ロッキード・スカンクワークス）よりもさらに深い闇の部局を持っていることを数年後に知ったとしても，私は驚きません。そしてそのような会社は，より深い闇の部局で行なわれる主要な仕事のフロント（隠れ蓑）とでも呼べるものなのです。

それから，政府にも別の部局があります。NRO（国家偵察局）が活動中であることは，長い間誰も知りませんでした（*1992 年にその存在，使命が公表された）。そして今や，NRO はバージニア州に自分たちの本部を建設するまでになりました。その経費は 8 億ドルだったと思います。しかし，その巨額予算が巨大な本部のために使われていることを誰

も知りません。それは実際には CIA（中央情報局）本部を凌ぐほどのものです。ですから，ここで私たちが置かれている状況は，誰かが当然の義務を果たしていないということなのです。それは国民のレベルでもそうですし，政府のレベルでもそうです。何が行なわれているか，ということに関してです。投資が適切に使われるかどうかを調査せずに投資する人はいないでしょう。国民にも政府にも，当然の義務を果たさない人がいるのです。

スティーブン・グリア： では，もう一つの質問です。ジャーナリズムとメディアについてはどうですか？ 普通に考えたら,彼らはこうした問題を真面目に調査したいはずですからね，嘲笑する代わりに。

ウィリアム・パウェレック： 私の目から見たメディアの問題ですが，これはあくまで私個人の見方です。というのは，私はあなたがインタビューした他の人々のようには，日常的にメディアと親密な関りを持っていないからです。ある程度はその中に身を置き，その外側を眺め，またメディアを完全な世論操作の道具と見ている一人として述べるなら，メディアはそれ自身のアジェンダ（行動原理）を持っています。それはきわめてリベラルなものです。もしメディアについてのギャラップ調査をしたなら，彼らが概してどちらを選択するかが分かったでしょう。私たちにはその代替となる，遥かに真実に近いメディアがあります。今日ではとりわけインターネット上のメディアですが，意図的に無視されています。真面目な事柄はどんなものでも嘲笑されるか，可能な限り無力化されます。その完全な一例が，2000 年に米国で行なわれた選挙です。そのとき私たちには，4 人か 5 人の合法的な大統領候補者がいました。しかし，主要な二大政党以外の候補者たちは，その討論が放送されることさえありませんでした。それはとても露骨な，支配メカニズムです。もし進行中の事柄が公平に報道されていたなら，私たちはすべての大統領候補者を毎回テレビで見ていたでしょう。そのような候補者は 3 人いたと思います。彼らは新聞などでも同じ回数取り上げられていたでしょう。

ですから，メディアがひどく操作されていることは明らかです。そしてメディアはそれを気にしません。気にするのは，ホワイトハウス記者になり，大統領に反対することを何か発言し，次の週に資格が剥奪されることです。そのようなことを一度経験すると，彼らの誰もが許容される報道の限界を知ります。しかし，これこそが今の社会全体で起きていることなのです。政府だけではありません。企業報道でも起きています。シー・エヌ・ビー・シー（*CNBC；米国の民放テレビ局）などはその典型です。彼らは企業の株価を上げる，良いニュースしか放送しません。その結果，広告費として現金がシー・エヌ・ビー・シーに流れ込みます。結局，これは収益の問題なのです。

[7]
==========
スティーブン・グリア： このインタビューの最初に戻り，ポープ空軍基地の近くで起きた出来事についてお訊きします。現れた物体の大きさ，形はどのようでしたか？

ウィリアム・パウェレック： 最初に現れたとき，その物体は白く，平たい円盤でした。奇妙だったのは，その白さがこれまで見たこともないほどの白さだったことです。それが最も近づいたとき，私たちからの距離は 300 フィートで，高さは頭上 50 フィートでした。湖ではなく松林の上空に現れたのです。完全に平らで，白色光よりも白い円盤でした。その上側には本体部，一つの丸い構造物があるのが分かりました。直径は 35 フィートから 40 フィートの間です。それは揺れていませんでした。完全に安定していて，ほとんど惰性で移動しているようでした。丁度ガラスの上を走っているような感じです。全くの無音で，時速 25 マイルから 30 マイルで移動していました。まるで，私たちがいたきれいな湖を観光でもしているかのようでしたよ。それが起きたとき，私たちは何かに突き動かされたように腕時計を見ました。そしてそれが去ってしまったときにも，また腕時計を見ました。ですから，私たちは失われた時間はなかったことを知っています。

しかしその物体は，私たちが気付かない影響を周囲の生き物たちに及ぼしていました。生き物たちは，私たちホモサピエンスが感知できない何かを感知する能力を持っています。だから，彼らはそれを感じて沈黙したのです。それは不気味でした。というのは，南部の夏は湿度が高く，音が 1，2 マイル先まで伝わります。ウシガエルが鳴くと，1，2 マイル離れた所からでも容易に聞くことができます。興味深かったのは，すぐ近くの場所だけでなく，音の届く範囲すべてが沈黙したことでした。その辺りには，古い砂の湖が幾つかあります。私たちがいた湖は，昔の採砂場跡につくられたレジャー湖の一つでした。最も私の興味を引いたのは，この物体が野生の生き物たちに及ぼす影響のことです。そしてそれが，人間の音の感知力を超えて浸透するという事実です。つまり，1，2 マイルという意味です。ですから，物体が移動すると共に，昆虫や他の生き物たちに及ぼすその影響の範囲も移動しました。

スティーブン・グリア： 他に何かお話したいことはありますか？

ウィリアム・パウェレック： 今回はありません。

スティーブン・グリア： ここまで，あなたが経験されたことをお話していただきました。

ウィリアム・パウェレック： はい。今回はこれ以上ありません。

スティーブン・グリア： 結構です。さて，丁度 1 時間経ちました。あと数秒残っていますので，お訊きしています。ランプが点滅していてまだ録音中です。何を伺いましょうか。あなたが最初にデンバーで一緒に働いたヒューズ社やマーティン・マリエッタ社の人間ですが，彼らは UFO の逆行分析（リバースエンジニアリング）について，何らかの情報または知識を持っていましたか？

ウィリアム・パウェレック： いいえ。そもそもの仕事が諜報データでしたので。彼らはスパイ衛星に取り組んでいて，その一つの側面が諜報データ，もう一つの側面がスパイデー

タを受信する電子技術でした。つまり，それが彼らの専門だったわけです。彼らは電子技術に関する最高級の知識を持ち込みましたので，私たちはそれを使ったのです。

スティーブン・グリア： 分かりました。大変ありがとうございました。

ウィリアム・パウェレック： ありがとう，スティーブ。

（訳： 廣瀬 保雄）